

令和4年城下町「からつ」俳句コンクール応募句総評

令和4年の城下町「からつ」俳句コンクールは、560名の方から580句の応募をいただきました。昨年度と比較して220句多く、コロナ禍の状況下に関わらず投句の数に見られる観光客の増加は喜ばしい事です。この気運の上昇が更に続いて欲しいものです。

投句された作品は、俳句よりも旅の印象を述べたものが多く、観光客の旅情と受け止めました。日頃、俳句とは無縁の方々が旅先で目にした投句用紙に旅の印象を書き留めたものでしょう。

来唐客の地域は佐賀県を除く九州・沖縄を筆頭に、関東・信越・北陸、更に唐津市内・佐賀県・中国・四国・近畿・東海・北海道・東北・海外の順になっています。投句をいただいた場所は、天守閣を筆頭に、城郭内・埋門ノ館・旧大島邸・旧唐津銀行・旧高取邸・郵便等となっています。男性の投句が298句、女性の投句は282句でした。投句された年齢は、二十歳未満、次いで20・30代、次に60・70代、40・50代、80代となっており年齢不詳の句も見られました。幼児や低学年の投句もありましたが、判読不能、意味不明のものもあり選の対象とはなりませんでした。

唐津城の石垣再築整備が続いており、まだ一部自由散策が出来ませんが完成の日を鶴首して待ちたいと思います。ご高齢の観光客からは、天守閣に登る階段が厳しいとの声も聴かれますが、健脚、健康管理のつもりで頑張っって欲しいと思います。

俳句は五七五の韻を踏み、四季や人生の機微を詠む日本伝統の短詩で、作品は映像を結び、感動、共感を与えるものでなければなりません。見たまを詠むと、無感動な言葉の組み合わせに終わってしまいます。高濱虚子は「梵鐘一打、余韻は嫋々として続いている。その様な句を詠んで欲しい」と言っています。心に留めたい教訓です。コロナが収束し石垣の改修も終え更なる観光客の来唐を期待したいと思います。

令和5年2月

選者 日本伝統俳句協会 評議員

ホトギス・花鳥・同人

唐津観光俳句会会長 田邊虹志 記